

# 三陸の水産加工 塩釜から復興を

電気と水道の復旧が進む塩釜市で、水産加工業者に操業再開の動きが出始めた。地震で傷んだ工場や設備に緊急措置を施し、まずは被害が大きかった宮城県内の沿岸部に送る食料品を製造する。業界団体では、気仙沼や右巻の業者の再起を支援する動きも始まった。関係者は「塩釜から三陸の水産業を復興させよう」と奮闘している。

タラ加工の「ヤママサ」は、まず寒風沢島へ運んだ。28日、試験操業を始め、震災の数日後には在庫は空になった。津波の被害は受けなかったものの、地震で工場の壁に大きなひびが走ったまま、被災した従業員も多く、出社できたのは40人のうち約半数にとどまったが、操業の再開を急いだ。

最優先で作るのは、電気復旧していない浦戸が諸島の避難所に送る煮魚。29日はサバみそ煮を保温容器に入れ、温かいとエールを送る。

## 操業再開へ業者奮闘

水産加工業70社でつくる塩釜市団地水産加工業協同組合によると、操業を再開したのは、まだ工割ぐらい。牛産を本格化させるには、輸入原料の確保や配送網の復旧、燃料不足など、見通しの立たない課題も多いという。

組合は被災した加工業者の再出発のため、利用可能な空き工場のリスト作りを急いでいる。

岸柳乃布夫組合長(59)は「かまぼこ工場が津波で全壊してまもなく、操一買で出直そうという社長もいる。被災した石巻の業者からの要請もある。何とか再起を支援し、三陸水産業の復興につなげたい」と奔走している。

(阿部信男)



浦戸に届ける煮魚の調理を見守る三嶋社長—29日午前9時30分ごろ、塩釜市新浜町のヤママサ

## 気仙沼、石巻の再起支援も